

回 覧



値小だより

島から日本一楽しい学校を
～子どもが未来に誇れる学校～

平成29年 6月 27日 第7号

校長 酒井 元治

小値賀っ子の心を見つめる教育週間

毎年、6月から7月は長崎県下各学校で「教育週間」を実施しています。この始まりは平成15年に長崎市で起きた中学生による痛ましい事件(いわゆる俊ちゃん事件)の反省に立ったものです。その1年後には佐世保市の小学校での事件、そしてそのまた10年後には同じ佐世保市で高校生による事件が発生しました。それぞれの子どもたちの置かれた家庭環境や持っている特性はあったにせよ、それまで各家庭で大切に育てられたかけがえない尊い命が失われたのは事実です。周りの大人が手をさしのべるところがなかったのか、事前に何か予兆やサインがなかったのか、そして他にも悩んでいる子や苦しんでいる子がいないかを学校だけでなく、地域社会にも見ていただき、もう一度子どもたちを取り巻く環境を見直そうという週間です。



さらに、この世に生を受けた私たちが等しく持っている尊い命について、人と人の関わりについて、みんなで考えていこうという週間です。

日頃私たちは「生きている」という感覚はもちろんのこと、「生かされている」感覚なんて感じることもありません。しかし、生きとし生けるもの全ては、等しくその命を終えるという逃れられない、いわば「義務」を負いながら生かされています。

あの当時、県内の子どもたちに対するアンケートでは、「人間は死んでも、何かしらの方法で生き返る」と思っている子どもがけっこういたことを覚えています。昼休み、校長室から見える子どもたちの元気な姿を見るとき、今、正に生きていることを楽しんでいる子どもたちの遊び声を聞くとき、この命というものとどう向き合い、どう教えようかと悩んでいるところです。

ママがおばけになっちゃった!

教育週間の校長講話

命の尊さについては、この教育週間に限らず折に触れて取り上げているところです。昨年度は私の講話でマンガを見せたこともあります。片倉真二さんの「ペン太のこと」というネコのマンガです。ちょっと泣けてくるようなお話です。YouTubeでも見ることができます。第1話がお勧めです。ご覧になってください。

さて、今回の教育週間の中で私が講話として取り扱った絵本は、のぶみさんの「ママがおばけになっちゃった!」です。内容は次の通り。



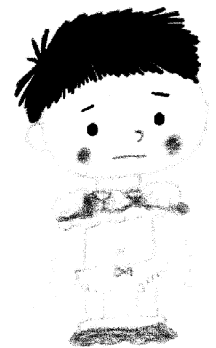
ある日、ママは車にぶつかっちゃっておばけになります。死ぬときまでおっちょこちょいなママです。でも、こうなると心配なのは、4歳の息子かんとらうのことです。家まで飛んでいくと、案の定かんとらうが泣きじゃくりながら、「おばあちゃん、ママどこに行ったの〜?」と聞いています。「ママはお空の上に行ったのよ。」とおばあちゃん。おばけになったママは横にいて話を聞いているのですが、2人には見えません。当然「ああん、会いたいよ〜!」とかんとらう。そのうち、おばあちゃんとかんとらうのやり取りが始まります。

かんとらう 「ぼく、ママに100個ぐらいウソついているのに、ごめんなさいしてない。」
おばあちゃん 「きっとママも許してくれるわよ。」
かんとらう 「ママに内緒で寝ているとき、鼻くそを口の中に入れたの。」
おばあちゃん 「あら、まあ。」
おばけのママ 「うっげ〜!」(この声は2人に聞こえない。)

という具合。やがて真夜中になるとふしぎなことが起こります。なんと、かんとらうにママが見えるのです。

かんとらう 「ママ、寝てるときに鼻くそ入れてごめんなさい。」
おばけのママ 「それは2度とやったらだめよ。おばあちゃんにもやらないのよ。」
かんとらう 「あと、寂しかったから、ママのパンツはいてごめんなさい。」
おばけのママ 「それは、はなくそなんかよりもやめておきなさい。」

そんな、話をしていたけど、やがて2人とも大泣き。おばあちゃんを起



こさないように、夜の散歩に出ます。外に出るとおばけでいっぱい。

かந்தろう 「ママ、おばけってたくさんいるんだね。」

おばけのママ 「そうね。人はいつか必ず死ぬの。死なない人なんかいないの。それで、死んだら、生きていたときにこうしておけばよかったなって思う人がおばけになるのよ。」

かந்தろう 「ママも、こうしておけばよかったってことある？」

おばけのママ 「そりゃ数えきれないくらいあるわよ。でもね、生きててよかったってこともたくさんあったわ。」

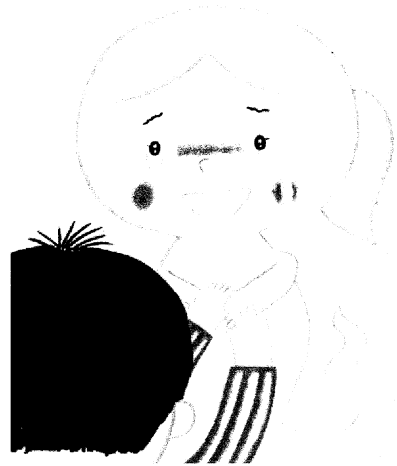
かந்தろう 「なあに？」

おばけのママ 「あなたを生んだこと。それだけはママ、大成功だった。涙がポロポロ出た。このために生まれてきたんだと思ったわ。かந்தろうが生まれて、初めて自分の命より大切だって思えるものを見つけたの。」

かந்தろう 「ぼくがママの子どもでよかった？」

おばけのママ 「もちろんよ！ママはかந்தろうでよかった。この手、この顔、この体の、あなたじゃあなきやダメなのよ。今思うとかந்தろうのいいところも好きだけけど、ダメなところもたまらなく好きだった。だって、あたしにそっくりなんだもん。」

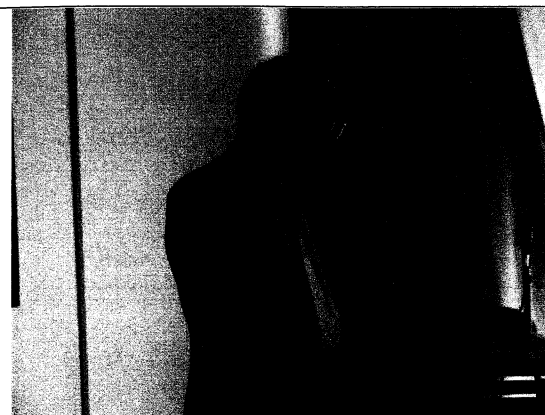
「これからママの言うこと覚えておいてほしい。新幹線が好きなかந்தろうが好きよ。友だちに優しくできるかந்தろうが好きよ。ブロックが好きなかந்தろうが好きよ。甘えん坊のかந்தろうが大好き。もう、数えきれないくらいの好きで、ママはずっといっぱいでした。かந்தろう、ありがとうね。かந்தろうのママで、ママは幸せでした。」



と、こんなお話です。はちゃめちゃで吹き出してしまう前半と思わずホロリときてしまう後半のギャップが何とも言えません。もちろん、お母さんが突然亡くなったならこんな感じではないことは百も承知なのですが、親の底知れぬ愛情とこの世に「生」を受けた意味を、子どもたちなりに感じ取ってくれたらと思いついてあげてみました。ただ、町立図書館にあるようで、読んだことのある子がけっこういたのが私としては誤算でした。(.-.;

でも、必ずこんな話は「ママ」ですね。「パパ」はどこ行った～！

厳しくも思い深き母の愛情



値小だより前号でお伝えしたように、21日(水)被爆体験者；小峰秀孝先生をお招きし、被爆体験講話を行いました。小峰先生は4歳のとき、爆心地より1.5km地点で被爆。運良く一命はとりとめたものの前身に大やけどを負います。限られた時間内でのお話では、その

後の被爆者に対する壮絶ないじめや差別についてでした。

全身ケロイド状態、特に足は奇形してしまって足の指は重なったようになっていました。小学校ではまともに歩くこともできず横歩きをする姿に、同級生は容赦なく「ガネ」(長崎弁のカニ)とあだ名をつけ、あざ笑い、衣服を脱がせてケロイドを見せ物にする、殴る、蹴るを毎日繰り返していたそうです。わら草履の時代、遠く離れた学校までの通学路は足から血がにじみ、冬の朝などは涙が出てきます。いじめを訴え泣き叫んでも、お母様は厳しく「学校に行け。」と言ひ、最後には蹴飛ばされたこともあったとか。当時は「この鬼母ちゃんめ。」と思ったそうです。それでも、小峰少年が学校から帰ってくるのを必ず家で待ち、血と泥で汚れた足を手で洗い、丹念に拭いてくださったそうです。

そんな小峰少年に転機が訪れます。小学校5年生の時、「これでは自分が壊れてしまう。どうにか仕返しをしよう。」と思い立ち、番長に決闘を申し込みます。案の定こてんこてんに殴られるも、執拗に食い下がり相手が根負けしたところを、何発も殴りつけ、子分たちから「小峰、もうやめろ。」という言葉を引き出します。(名前と呼ばれたのもこのときが初めて)

でも、差別やいじめは学校だけではありませんでした。就職をするときにも、被爆者だからと拒絶され、やっと雇ってもらった美容院で修行の日々。年頃になって女性に対する意識も芽生えるが、被爆者を理由になかなか言い出せない、付き合ってもらえない。そんなある日、ある女性と知り合い付き合うことになります。しかし、またもささやかな幸せを妨害するのは「被爆者」というたった一つの事実です。彼女の親から「会ってくれるな。」との言葉に、小峰青年は自殺未遂を図ります。寸前で命をとりとめた小峰青年を厳しくも温かく包んでくれたのはご両親でした。やがて、この嫌な思い出から逃げるように大阪に移ります。大阪での生活が何ヶ月も経ったある日、小峰青年を訪ねてきた女性は、あの長崎の彼女でした。家出をして追いかけて来てくれたのです。家出までする娘にご両親はやっとの思いで結婚を許すことになります。(「小峰秀孝」で検索すると、ネットで体験談を見ることができます。)

小峰先生は、今の自分があるのは、そして強く生きられたのは、母親の深い愛情に裏打ちされた厳しさがあったからだとおっしゃっていました。